



首都大学東京

TOKYO
METROPOLITAN
UNIVERSITY

舛本 直文

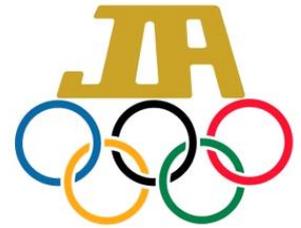
- 大学教育センター・人間健康科学研究科教授
- NPO法人日本オリンピック・アカデミー理事
- 自称：オリンピックの伝道師

JOAにおける2020年東京大会に向けた取り組みと日本版Podiumの展開



NPO法人日本オリンピック・アカデミー (JOA) の取り組み

- JOAの中長期目標：
「オリンピズムの普及と浸透」
- 2015年現在，組織として大学連携事業には携わるのは限定的であるし，年間計画でも連携事業を拡大する予定はない。それは，組織の性格上当然かもしれない。
- 現在JOAは，各地の連携大学から組織委員会に講師等の派遣要請があった場合に，人選など調整して派遣する事業をサポートしているに過ぎない。
- 大学連携事業の委員会のメンバーにJOAの会員が複数名加わっているが，それはJOAの会員であるというのが主たる理由ではない。



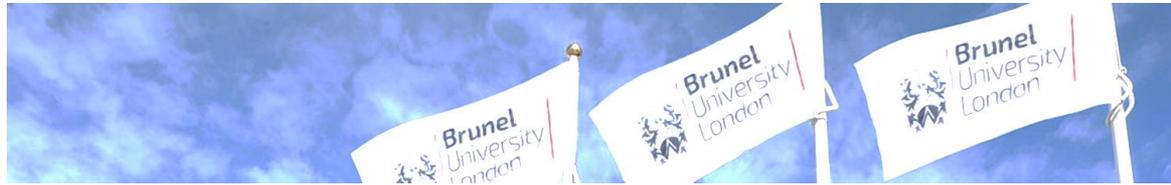
Podiumとは

- 2012年ロンドン大会で活動した英国版大学連携事業
- ロンドン市だけでなく、英国全土の大学がオリンピック・パラリンピック大会に関与するために、英国高等教育セクションのファンドで設立された組織
- ボランティア調整から文化プログラムや空席処理まで、ロンドン大会の成功に向けて幅広く活動した。
- 2016年リオ大会へもボランティア派遣の窓口にもなっていたが、2015年1月末に資金カットのため閉鎖された。
- その意味では、残念ながら、レガシー化はされなかったといえる。



メガイベントの教育的レガシー (Graver et al, 2010): Vassi Girginovによる紹介から

- 学校でのスポーツと体育への参加の増加
- 価値教育
- カリキュラム開発
- ボランティア教育
- 文化理解の促進
- ボランティアの技能向上
- 教育機関への利益



オリンピックへの高等教育部門の参加：多くの人々がオリンピックのメッセージの元に結集できる構造的な環境にあり、そのため大学スタッフや学生達が自ずから熱心に取り組むことになり、幅広いオリンピックプロジェクトが支持されることになっていく。(Girginov, 2014)

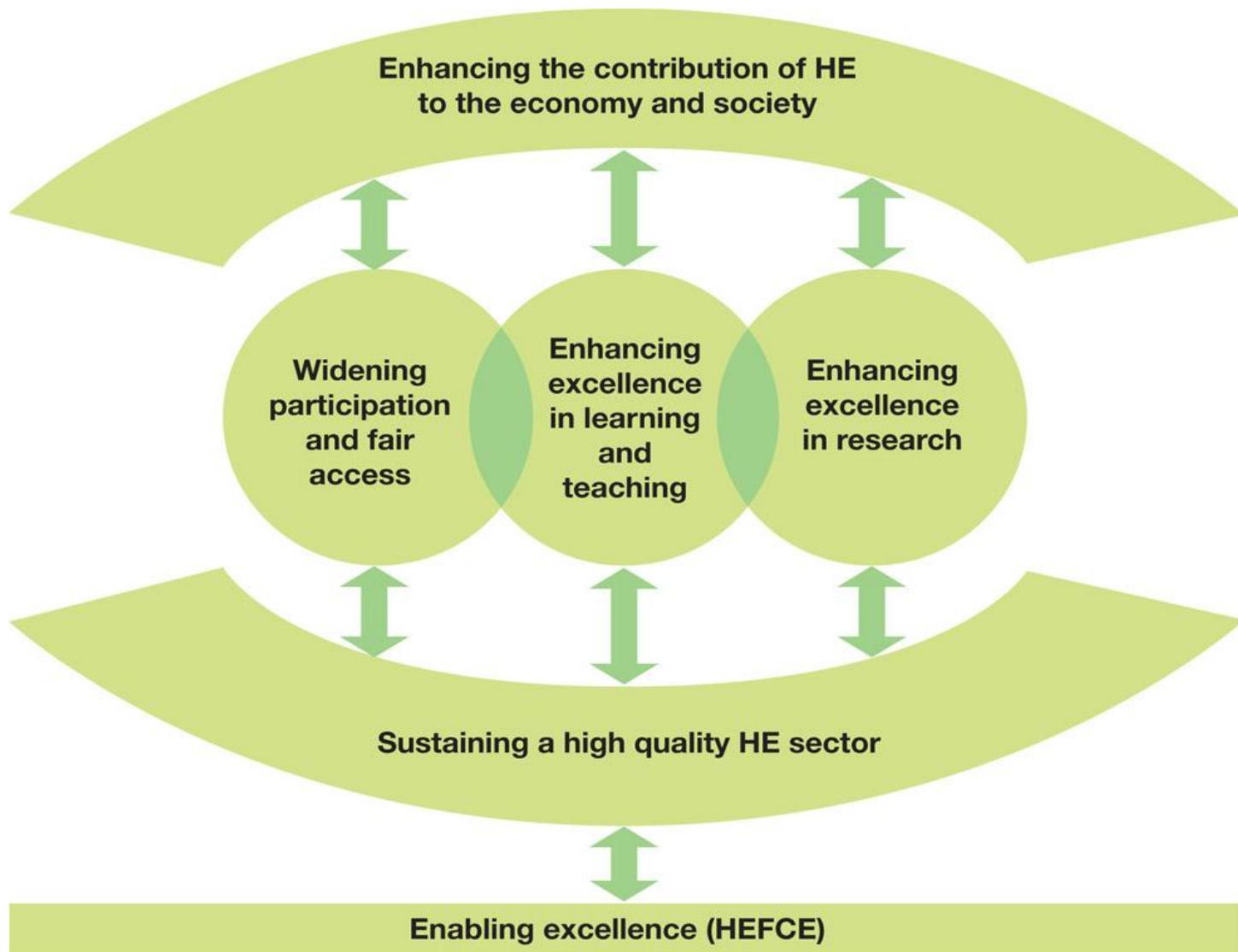


英国の高等教育部門： 社会・経済的パースペクティブ

- 英国高等教育部門
 - 162大学
 - 100万人の学生
 - 262,700人のスタッフ
 - 2,800万ポンドの収入
-
- 英国高等教育基金カウンスル（HEFCE）の戦略
 - * 入学者の拡大と公平なアクセス
 - * 教授・学習の成果の向上
 - * 研究成果の向上



英国HEFCE strategic priorities 2008-2015



Podium（表彰台）：2012ロンドン大会の 第3の高等教育ユニット

・コンセプトとビジョン

- ・2012年ロンドン大会を成功裡に運営するために、大学や短大が支援できる可能性を、部門内や他の組織と連絡調整すること
- ・2012年オリンピック・パラリンピック大会を開催することによる利益を最大にするために、部門内の活動を展開する際の調整を行って、広範で持続するレガシーを残すこと



Podiumのガバナンスと資金

- 実行委員会
- 3人の専従スタッフ
& ボランティア
- 資金
 - 英国高等教育基金カウンスル (HEFCE)
 - 技能基金エージェンシー (SFA)
 - 大会後の寄付



Podiumの活動とプログラム

コミュニケーション重視

- 専用のwebsite (www.podium.ac.uk)
- [PODIUM](#) スポットライト・マガジン
- 月刊ニュースレター (eメール)
- FEニュースレター (eメール)

調整活動

- イベント
- 学会



PODIUMの主なプロジェクト



- **雇用機会の創出**：10万人，時給8.3ポンド（英国の法定最低賃金），多くの仕事が2012ロンドン大会の会場での小売り，ケータリング，清掃に対して責任を持つ職務内容
- **大会の専門家**：400人の研究者のDB

自由アクセスの無料のオンラインデータベースDBであり，英国のFEとHE部門の400人以上のオリンピック・パラリンピックの専門家が登録された．これは2012年ロンドン大会の公認事業であり，大会中はオリンピックパークのMPCで活用された．世界のメディアによって，最新ニュースで権威筋のインタビューを得るために利用された．PODIUMのオンラインDBは **Games-Experts.com** (www.Games-Experts.com) と呼ばれ，世界中のメディアと研究者達が，オリンピック・パラリンピックに関して様々な問題に関わった経験を有する専門家を探したりコンタクトするために活用された．



PODIUMの主なプロジェクト

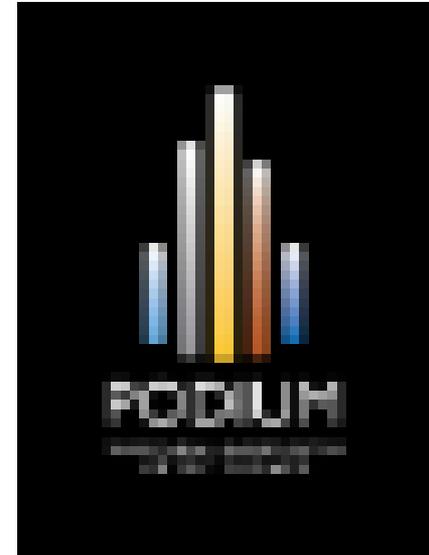


- **キー・シート**：多くのオリンピック会場で見られた空席に対するLOCOGの即応的なプログラムとして実施された。これらの座席は、元々はトップスポンサーとVIPに割り当てられた特等席であるが、彼らがその競技に関心がなかったりして活用できるようになったものである。LOCOGは毎日座席の埋まり具合をモニタリングし、PODIUMを通じて、学生達がきちんとした身なりで、適切な時間に観戦できるような状況で、大学生達に特等席のチケットを、毎日、相当数提供した。
- **大学ウィーク**：HE部門が大会に参加することを特別に祝うように計画されたものである。この大学ウィークの最後はPODIUM賞という特別なセレモニーで最高潮に達した。



英国高等教育基金カウンスル（HEFCE）の 基金によるプロジェクト例

1. Creative Campus創造的キャンパス
（南東地区）
 - 創造的キャンパスは、高等教育において、社会的・経済的・文化的なコラボの継続的なレガシーを創造することを目的としている。多様な文化背景を有する若者たちを結集して、新しい革新的な創作芸術やパフォーマンス・アーツを生み出した



2. JOB OPPORTUNITY: RELAY芸術とユース・スポーツの地域の教育レガシーRELAY（南西地区）

- RELAYSは、若者の参加と技能向上，教育的準備の改善，新しい持続的なフェスティバルやイベント，地方の文化ツーリズムの提供，効果的なビジネス事業などの継続的なレガシーを創造することを目的としている。



3. Volunteer Opportunityボランティア2012 (北西地区)

- Volunteering 2012は、北西地区の地域スポーツのニーズを満たすために、高度のスポーツ・ボランティアとコーチング技術の向上と提供を目的としている。



4. Tackling Social Inclusion 社会的インクルージョン問題への取り組み（北東地区）

- Sports Universities in North East England (SUNEE)
- SUNEEは、大学が社会への参入問題に取り組むことに貢献し、地域に参加しアウトリーチ活動をするために、方向性を変えることに資することを目的としている。



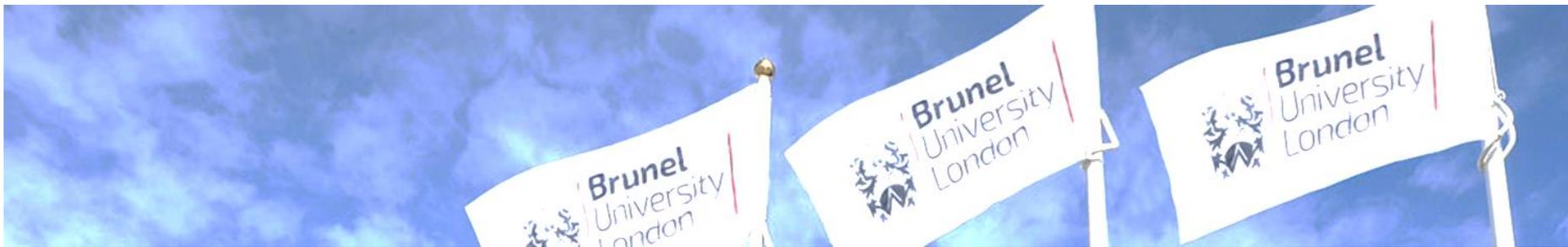
5. Sports Disability Officer障がい者のスポーツ役員（ノッティンガム大学）

- ノッティンガム大学及び英国大学スポーツで実施
- HEFCE基金は、障害を持つ学生のスポーツ参加のバリアを評価し、そのバリアを克服する仕事をするために、障がい者のスポーツ役員を支援するために用いられる。



Podium から2020TOKYOへのレッスン

- 明確なビジョン構築と権限付与
- シンプルなビジネスモデルの構築
- 費用対効果のコミュニケーション戦略
- 全国的参加の確保
- スポーツと他のプロジェクトのバランス
(Girginov, 2014)



日本版Podium＝カルデロン（仮称）構想

- Podiumの成功を受けて，2020年東京オリンピック・パラリンピック大会でも大学連携の組織化を図り，日本独自の活動を展開しようと構想したものが，日本版Podium＝「カルデロン（仮称）」構想である。
- 参考：カルデロンcauldron＝大きな火釜
聖火台のこと



日本版Podium＝カルデロン（仮称）の現状

<現状>

- Podiumの成功から学ぶため，活動の実際や事務局の組織化，スタッフや予算等の基礎資料を収集している段階
- Podiumの事務局長及び設立時の理事などにヒアリングをし，成功の秘策などの基礎的な分析研究をしている。
- 今のところ，我が国にこのPodiumが全面的に参考になるかどうかは未確定な状況である。
- 現在は，研究グループを組織してイニシアティブを取りつつある。



カルデロン構想：研究グループ案

1. Podium先例事例研究グループ（G）
2. 各大学オリ・パラ支援企画プログラム調査研究G
3. 各大会の大学オリ・パラ教育支援プログラム調査研究G
4. YOGにおけるCEPと大学関与調査研究G
5. 東北支援企画研究G
6. カルデロンのモデル事業作成G



カルデロン構想：各大会別G案

1. 2012年ロンドン大会の先行事例「Podium」調査G
2. 2016年リレハンメル冬季YOG大会のCEP調査G
3. 2016年リオ大会の大学連携事業の事例研究G
4. 2018年ピョンチャン冬季大会の大学連携事業の事例研究G
5. 2018年ブエノスアイレスYOG大会のCEPや教育体制の調査G
6. 2020年ローザンヌ冬季YOG大会のCEP調査G
7. 2020年東京オリンピック・パラリンピック大会に向けた連携事業の提案とロードマップ作成（全員）

☆あくまでも構想中です！



ご静聴, どうも有り難うございました!

